

日独の間の著述活動

スウェン・ホルスト

ドイツにおける外国人文学

最近までドイツは移民国家ではないと考えられていた。しかし60年代から外国人労働者がドイツに住み着き、他国からの難民がドイツに逃げ、旧東欧ブロックの崩壊とともにロシアからたくさんのドイツ系とユダヤ系の移住者がドイツにきた。これによってドイツでも移民問題に対応せざるをえなくなった。移住者のドイツ語における文学活動を移住者文学という。

昔からドイツ語は中央ヨーロッパの交通語であったので、外国人のドイツ語の文学活動は珍しくなかった¹。二つの世界大戦によってその役割が中止された。

戦争の被害を乗り越え、60年代から外国人が研究者・亡命者・労働者として再びドイツにきた。出身国で文学活動した作者は出身国との対応をテーマにした。外国労働者のドイツ語能力が低かったし、生活環境は文学活動を促進しなかったが、母国で高等教育をうけた人々も出稼ぎ労働者としてドイツにきて、そこで学歴から考えたら相応しくない単純労働をし、この状況に文学を以って対応した。また、外国人労働者の子供たちがドイツの学校教育をうけ、彼らは親の文化と受け入れ国の文化の間の体験を文学に活用できた。1985年からドイツ語における外国出身の作者のため、Adalbert-von-Chamisso²賞がある。それから文化格差や被差別に苦しんでいる外国人労働者の作品が増え、このような作品のドイツ社会への問題提起が注目を浴びている。時代とともに多和田葉子のように純文学に進出する作者が現れ、母国語とドイツ語の溝から言語の新しい可能性を開拓している³。その外国人作者の中に早い時期に活動を開始したのは、日本人留学生であった松原久子であった。松原氏は移民文学にまだ慣れていなかったドイツ人に彼女のドイツ経験と日本を説明した。

松原久子の履歴

松原久子は京都市北区賢勲神社宮司の娘として1935年に生まれ、1958年国際基督教大学教養学部人文科学科を卒業後、米国ペンシルヴェニア州立大学院舞台芸術科で修士号を取得した。同時に日本演劇史を講義し、英語の『竹取物語』を版画家である妹の作品を添え付けて出版した。それからスイスと西ドイツに渡って、チューリヒ、マールブルグ、ゲッティンゲン大学で比較文化史を専攻し、1970年にボーフム大学で『竹取物語』をテーマとした博士号を取得した。ドイツの週間新聞“DIE ZEIT”にコラムを持ち、西独テレビ（WDR）の番組で日本紹介番組や国際記者座談会に出演し、ドイツ語で著書（短編や小説、評論）を多数出し、ドイツペンクラブ会員になった。学術論文のほかに日独米の雑誌にも寄稿した。1987年より米カリフォルニア州に移住し、スタンフォード大学フーヴァー研究所特別研究員になった。ドイツ語による著作の一部は世界8カ国で翻訳出版された。

松原氏のドイツ語における著述活動

著者の活動は四つの流れから構成される。

第1の流れ：外国人から見たドイツとドイツ人、ドイツ経験が鋭く、面白可笑しく、随筆の形で綴られている。時代背景：戦後の経済復興を成し遂げたドイツで、自信を取り戻したドイツ人の世代対立（1968年の学生運動）に新たな疑問が投げかけられた時期に、外国人からの声が歓迎された。著書：“Blick aus Mandelaugen”, “Kleine Weltausstellung”, “Glückspforte”, “Barbarische Ratschläge”

第2の流れ：日本人としてドイツのメディアで活躍し、ドイツ読者に日本の社会の欠点を説く。著作スタイルは随筆から自分の体験に基づいた小説に変わった。時代背景：手強い市場競争相手になった日本に対するドイツ世論の批判が高まった。著作の中の後者2冊は日本ブームに遭い、ブームを挟んで続けられた。日本経済のバブルが弾けると、ドイツの世論は早くもとの批判に戻った。著書：“Brokatrausch”, “Die Innere Mauer”, “Abendkranich”, “Brückenhof”, “Karpfentanz”

第3の流れ：松原氏は日本専門家として宣伝活動し、解説書を書いた。時代背景：日本の、続く成功によって、ドイツの世論はついに日本最良に変わったが、これはバブル崩壊とともに短時間に終わった。“Weg nach Japan”, “Raumschiff Japan”

第4の流れ：娯楽性の時代小説である。時代背景：ドイツ世論の日本への関心が絶えた。大衆文学においては時代小説が流行っていた。著書：“Himmels-

zeichen”

以下に松原氏の主な著書をあげる⁴。

“Blick aus Mandelaugen”『アーモンド・アイからの視線』

初版の副題：“Eine Japanerin in Deutschland”『ドイツにいるある日本人女性』1968年 Piper Verlag München,

後の増補版の副題：“Ost-westliche Miniaturen”『東西の細密像』、1980年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1984年 Lübbe Verlag Hamburg

この著書はドイツの週間新聞“Zeit”に連載した随筆のようなコラムをまとめ、短編集として出版された。

内容：微笑んでいる日本人（日本人のイメージ）・極楽であるドイツ（ドイツ人と外国人、親と子供）・おとなしい子供（子供教育の違い）・私はドイツ語を勉強している（大学の硬い規定・官僚主義）・重要である健康問題（ドイツの温泉やサウナでも真面目に振舞う）・私はもっとドイツ語を勉強している（難しいことだけが価値があるので、ドイツ語は難しい）・交流する文化（文化鑑賞と受け入れの日独米の違い）・ケルンの文化に関する苦勞（ドイツ放送局での仕事）・清潔と礼儀（日独の違い）・面目を失わない（ドイツにもあるが、日本人は他人の面目を考える）・口（身振りを見せない）・ハラキリとカミカゼ（自分の名誉を切腹（東）と対決（西）で守る、神風パイロット）・ケース：ヨハンナ（才人と権力の問題）・神道信者と仏教信者、キリスト教信者（「いろは」歌と仏教）・玉露（緑茶とワインの味に慣れにくい）・食事を真面目に考える（和：食の楽しみ 独：健康）・派手な騎士（女性に対する日本男性“武士”的な、ドイツ人男性“騎士”的な行動）・初夢（身長と運転免許）・芸者（芸者と遊女の説明）・触わるに関する手紙（西洋人は互いに触り、拍手する）・キスに関する手紙（日本には本来キスがなかった）・電話でのモノローグ（上級社交）・絵画と木（読者のコラムへの反応、自分と日本）

ドイツ人は頭が固くて、外国人との接触になれていない、自分の習慣と偏見を守っている。松原氏が日本も分析し、相手への思い、社交と宗教のしなやかさを賛じ、自由表現が抑えられていることを批判する。松原氏はただドイツで経験した可笑しい出来事を著述しているだけではなく、より根本的にドイツ人と外国人の関係とドイツ人の外国人からの批判の対応、移住民の心の中の母国と受け入れ国の葛藤を多少考察している。「ドイツ読者との間の問題は、彼らは私を外国人と見るが、私は彼らを人間同士として見る。(p.134)」や「アメリカ

人がだれかの写真をとるときに“Say cheese”と言う。ドイツ人は「とてもやさしく」を評論家に期待する。いいドイツ人は自分の巣のイメージに対する責任を持ち、その巣を汚染から守らなければならない。逆に、日本人は批判に熱中してしまう。特に、外国人からの批判に。しかしながら、その外国人はあまり専門知識を持っていないと私は評価している。(p.136)」⁵

一人の日本人読者の「東西を理論的なレベルに議論したほうがいい」という意見に対して、著者は「理論的なレベルがどこにあるかはよく知らないが、私が世間を眺めているレベルよりずっと高いレベルであろう。その高い所に居座っている方々はたくさん重要なことを述べているが、残念ながら彼らの言葉はだいたい人の頭の上に飛び去っている。それは彼らの高い位置のせいである。(p.138)」このような自分の経験に基づいた具体的な話を学術的な論より好んでいる。著者はこの姿勢を最近の著書まで貫いている。この手段によって、著書が分かりやすいが、誤解や偏見を齎す危険が高くなっている。

この著作に対するドイツの書評は好意的であった。「たくさんの心地の悪い真実。視野が狭くない方にとっても読む価値がある本である。」⁶この著書の中に批判された異国情諸的な見方が、著者にとって有利に働いていた。書評の中に日本のイメージ(ステレオタイプ)が表れた。「松原久子の批判的、たまに自己批判的な周りの世間の観察は意地悪くなく、他人の不幸・失敗を喜ぶこともない。これは日本の献上品のように絹の風呂敷に包み、それを開くと、いくつものねずみ花火も入っている⁷。」この書評者は、封建主義と伝統(風呂敷と献上品)や花火を連想している。芸術家の雑誌に女性書評家の以下の連想がある⁸。

日本の女性のイメージ：魅せられ・魅力的なアーモンド・アイからの視線、
子供のような魅力

伝統：古い神道宮司家に生まれ、母は皇室の有職師、古からの文化

小さい・細かい物

著者はドイツにある異国情諸へのあこがれを利用した。タイトルや表紙はその情諸に訴える。「アーモンド・アイ」は東亜女性の異国情諸的な記号である。著者は必ず題を決められないが、ドイツ読者の異国情諸感覚が1968年から多少変化した12年後の増補版でもその題を使い続けたので、著者はそれをある程度認めていたのであろう⁹。ドイツ人の無条件な日本蟲屑(特に日本女性に対する)に対して「私は不協和音を聞いている。(p.139)」と著者が疑問を表明している。しかし異国情諸的な好書評「ある方は私の著作を細密画と呼んでいる。それはこの方に「日本の水墨画のつつまやかな筆技、版画の省く気力、三行の俳句の集中」を思い出させる。(p.140-141)」を喜んで受ける。ヨーロッパ知識人に受ける自己批判的な態度をとりながら、自分は日本的である、いわゆる日本を代

表できると述べている。「[典型的な日本人]として表すのは私にとって好ましくないと告白した。しかし、私は自分の奥深くにとっても「日本的」と感じることを認めざるを得ない。(p.141)」それを禅的な話で具体化しながら、読者に東亜の知恵への好感を与えてその本が終わっている。

「外からドイツに近付いて、中から知ることができた。日本は中から知っているが、長いヨーロッパ滞在によって距離ができた。毎年、何ヶ月か日本にいますが、その時にドイツは故郷のほどになったと感じている。両方を説明するために両方を愛さなければならない¹⁰。」ドイツに対する愛はラブレッタではなく、批判でドイツの国際意識を高めようという形で表されている。

“Hisako Matsubara’s kleine Weltausstellung”『松原久子のささやかな世界展』副題：“Ein literarischer Pavillon”『文学的なパビリオン』1970年 Piper Verlag München

この小さな本のきっかけは大阪万国博覧会であった。先作品の短い、随筆のようなスタイルが誉められたので、作者は文化の違いというテーマから少し離れて、ドイツにおけるできごとのほかに日本の日常生活を伝えようと先作品より試みた。

この著作に：日本についての2つの話、来日した外国観光客の3つの話、日本人留学生の経験の4つの話、ドイツの話7つ、日独比較の話1つ、もう1つは大阪万博のドイツパビリオンが含まれている。

先の著書よりあいまいでインパクトが薄い。著者は日独の問題だけではなく、純文学へも挑戦した。しかし、この著書は再出版されなかったので、純文学の試みを諦め、わずかの実用本以外は日本紹介に止まることになったのであろう。

“Barbarische Ratschläge”『蛮人的なアドバイス』Merian（外国紹介雑誌）“Tokio” 1972年

著者は以下の偏った考え方を皮肉っている。背が高く、洗礼を受けていて、食事はナイフとフォークで食べるので、外国人が日本にきたら、自信をもって、堂々と振る舞ったほうがいい。そうすると日本人はそのような「外人」にあこがれる。日本人は集団生活は怖く、経済的な危険であり、名刺は重要であり、ドイツ人と同じく肩書きを好む。また目の整形をし、「外人」(白人)を優先する。日本人の英語を分らない、日本人は外国人の意見に合わせる、日本人の「外人」コンプレックスを持ち、基督教の自己中心主義を持ち、日本人は外国人を社会の一人として認めない。

自己中心に満ちた西洋人を皮肉でその先入観を認め、西洋人コンプレックス

の日本人を茶化しながら、最終的に日本人は西洋人を受け入れないと説く。この雑誌は観光スポットの裏のその国のことを知りたい、教育のある読者層を意識している¹¹。このような読者たちは、これは自分ではなく、他の旅行者であると思い、このような皮肉を楽しめる。

“Brokaträusch”『錦酔い』

1978年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1981年 Aufbau-Verlag TB Berlin (DDR), 1983年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1986年 Goldmann Verlag München

20世紀のはじめの日本の田舎町に展開する長編小説である。古い武士である父隼人は第一位として東大を卒業した婿養子が大企業に入れず、一人アメリカに送った。「武士は他人の力に頼らず、一人で成功しなければならない。」と父は信じている。アメリカに渡ったヤクザのような人の例に目を暗まし、町の世論に追われ、婿養子が錦を飾るという期待をしている。その父は明治という時代に合わず、世渡り上手な人に利用され、気質を保ちながら少しずつ没落する。彼は気質が高くて優しいが、家族の中で自分の思いを通すので、娘と婿養子の幸せを破壊した。錦を飾る期待が外れ、中傷的な噂によって、娘とその夫は再会できなくなる。

作者の第一の長編小説である。材料は著者の家族の歴史であるが、伝記ではない。再出版と英語やスペイン語への翻訳はその作品の人気を語る。後の著書に強く表れる、著者の父への愛着と尊敬から考えると、この著書は著者にとって日本の父像を描く大きな挑戦であった。そのアンビバレンスを表す物はその父のお気に入りの能面である。この能面が穏やかな表情と苦笑い(95ページ)をみせ、呪いのように家族の女性に迫っている。

書評の中、その著書の東亜性が重視された。「東亜スタイルの細工大作である、調和的によく構成された重い表現が少ない。始めと終わりの月夜のシーンは千年前の女官紫の『源氏物語』を思い出させる¹²。」

“Glückspforte”『幸福の門』

1980年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1982年 Bastei Lübbe Verlag Bergisch-Gladbach

ドイツと日本の隔たり、小さな国際ラジオ放送局のディレクターと人気が衰えた日本有名人の話である。ウバ氏は政治家の娘として、早い時期に渡欧し、帰国後にヨーロッパを昔話のように説明し、ベストセラーを出版したが、その後ヨーロッパに行く日本人が増えたとともに彼女が忘れられていった。その不

運を変えるため、人気であった時に二度しか会ったことのない元ドイツ外交官・現ドイツ国際放送局アジア局長であるマクシル氏を利用したいと思った。マクシルは無限的に肩書き（有名な評論家）や上流社会の話（天皇の顧問）を信じる人であるので、周りの警告を無視し、ウバ氏をドイツに招き、放送のための執筆中に自分の豪邸に住まわせている。ウバ氏はこの実態を利用し、自分を日本のメディアに売りはじめている。滞在理由はドイツの文化を向上するために招待され、そのために大統領と会議し、マクシル氏の豪邸を自分の家とみせかけ、マクシル氏はその庭師、彼の奥さんはお手伝いというように大嘘を付き、人気を取り戻していく。マクシル氏は自称日本通であるが、日本語ができず、ウバ氏の活動を把握できない。著者がドイツの社会と西ドイツ放送局との経験を長編小説にした¹³。この著書は長編小説として、著者の第2の流れに属するが、内容的にドイツの経験が綴られているので、第1の流れに属すると考えられる。日本人の国際意識の低さや黒幕の活躍に少々批判的であるが、一番はマクシルの代表するドイツの上流社会の権威への盲信を笑い種にしている。

“Die Innere Mauer”『中の壁』Merian（外国紹介雑誌）“Japan”1980年

貧しい家族の息子は、両親の彼の教育のための犠牲と町内の噂に追われ、一生懸命勉強した結果として、京大に入学ができ、京大卒業後、宮内庁に就職している。そこでも一生懸命に働いているのに、よりいい家族背景の同僚に追い越され、親と町内の期待を果たせなかったため、彼は自殺に追い込まれている。

日本の平等な表面的に調和した、社会の中の差別や中の圧力を示唆する短編小説である。この雑誌はこの時期に日本の社会に批判的であった¹⁴。それに合わせ、この短編小説が日本の社会の影の部が描かれている。

“Abendkranich”『夕鶴』

副題：“Eine Kindheit in Japan”『日本におけるある子供時代』1981年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1983年（第4版 1989年）Bastei Lübbe Verlag Bergisch Gladbach

作者は自分の子供時代と家族をモデルにして、戦争中と戦争後の時代を著述する。『錦酔い』の父が孫娘、主人公サヤの母を通して、曾孫娘まで影響を与えている。話の中心は我が子を統制し、自分が示している、社会が認めている道に導きたい母と自由に自分の道を歩きたい娘の対立である。父は、対照的な母と女性教員に安らぎを与えながら娘を自由に成長させている。その父は宮司として単純な愛国主義に批判的で、東アジアの知恵を代表する。母は社会的な競争の中に評価されたがるのに対し、父は仙人のように世間から一足退いたこと

によって、人々に親愛と信頼があった。この著書の中で、よく外国人に賛美された日本女性は、社会の悪である精神的な圧力や非自主性の代表とされた。著者が一般人に理解に満ちた眼差しを注いでいながら上級社会の女性に容赦ない。外国人(宣教師)が女性を日本の男性よりよく扱うので彼女は基督教に引かれている。しかし宣教師の主張とその行動の差が始めの戸惑いも産んでいる。

“Weg zu Japan”『日本への道』副題：“West-östliche Erfahrungen”『東西の経験』

1983年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1986年と1987年 Bastei Lübbe Verlag Bergisch-Gladbach

日本とドイツの経験をまとめ、第一冊に随筆の形で表現した経験を体系化し、ヨーロッパ史の影の部（ヨーロッパ人同士の奴隷貿易など）を明かす。著者はドイツの世論が日本を正しく評価しないと嘆き、その上でドイツの日本研究者の活動を低く評価する：「言うまでもなく、専門的に日本文化を研究し、「紫式部日記における変形否定の論理」とか、「寛政重修諸家譜に顕著な旗本系譜の特色」あるいは「日本の主要産業生産指数と産業別雇用者数の推移にみられる関連」などの論文を専門誌に発表し、数人の学生を前に講義している一握りの学者が存在することも事実である。」¹⁵「しかし、大半は、自分たちが人類の中心であり、文明の頭脳であるという世界観に甘んじてきたために、世界市場を制覇するかにみえる日本商品を量の凄さに圧迫され、その商品の背後にあるより優秀な技術をみせつけられ、失業をせまられ不安を感じるのみでなく、誇りを傷つけられた腹立たしさを、次のような希望的観測でもって何とかまぎらわしている。」¹⁶

“Brückenbogen”『橋のアーチ』

1986年 Roman Albrecht Knaus Verlag Hamburg, 1989年 Roman Bastei Lübbe Verlag Bergisch Gladbach

母と一緒に広島原爆を体験した、大阪出身のユミのアメリカ留学の話である。母が原爆の少し後に亡くなったがユミは橋の下にいたので、病気のしるしをみせていない。医師である父が被爆者の差別を考え、原爆の体験を秘密にすることをユミに誓わせていた。アメリカのいい点と悪い点とあって、大学の日本人コミュニティーとぶつかりあい、アメリカの劇監督に恋し、自分が提案した芝居で自分の秘密を明かしていく。

“Abendkranich”や“Glückspforte”のように著者の体験が基になった長編

小説である。アメリカの人種差別や性に対する態度や大学内の競争を、多少批判している。しかしこれより日本の社会の被爆者差別、噂の圧力、権威頼りに対する批判が色濃く表れている。それに対して父が頼れる存在であるが、前作『夕鶴』の宮司より弱く、周りの噂を信じないとしながら、その影響を受けている。義母が前作より単純な性格で、完全に周りの評価と価値観を調和する努力に追われる存在である。この著書の母は社会の被害者のように描かれているに対し、前作『夕鶴』の母は、それより加害者的である。

“Raumschiff Japan”『宇宙船日本』副題：“Realität und Provokation”『現実と刺激』、1989年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg

この著書では、江戸時代の日本を将来のモデルとして提供している。鎖国した日本と地球に閉じ込められている人類の共通点を示し、人類が江戸時代の日本から学べる点をみせている。“Weg zu Japan”との共通点が多く、環境面で強調し、文化比較を減らし、日本社会的な特徴に絞っている。

バブル絶頂の時期の日本から学びたいドイツの読者が多く、この市場のために書かれた本である。著者は歴史的な史実を勝手に解釈し、都合のいい例を選ぶことによって、いいイメージを作り上げている。危機や今の価値観に違反する史実は環境の影響として説かれ、西洋史からのよりひどい史実にもみ消されている。江戸時代には「草の根民主主義」があったそうである¹⁷。史実から離れた和平的なイメージを作っている。一般読者は著者の日本人として、研究者としての権威によってこのような話を信じる。結局、異国情緒的な楽園のようなイメージが再建されている。著者は初著書に江戸時代の日本を「警察国家」と呼んだ¹⁸が、1989年に著者はその国家を将来のモデルとして勧めている。歴史に基づいた日本人論を書いているながら、当時日本に流行った人種主義的な日本人論を拒否している¹⁹。

“Karpfentanz”『鯉の踊り』

1994年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg

『夕鶴』の続編である。この著書の主人公は兄リョである。先冊の主人公サヤがドイツに留学し、そこでドイツ人の病院院長と結婚していた。その国際結婚によって、リョの結婚のチャンスが縮小されていた。しかし母はリョと自分の評判のため、社会的に高く評価する結婚相手を望んでいる。母の努力によってリョは銀行の中で出世するが、自分が無能だと落ち込んでいる。そのリョがある同僚と結婚したい。母は普通の家族背景のため、その相手を拒否している。兄リョは他の同僚との賭けのために結婚を早め、彼はいうまでもなく、母も満

足させない手当たり次第の結婚相手と結婚する。その嫁にとって、リョはただ友人たちの夫より太い「鯉」である。リョは好きな同僚と結婚できないことを国際結婚している妹サヤのせいにし、彼の結婚に駆けつけたサヤを殴っている。

この著書が早い時期に計画された²⁰。バブルの時期に日本を賛美する動きに合わなかったのでその計画が延期され、バブルが弾けたからこの著書が市場に送られたのであろう。

“Himmelszeichen”『天界の印』

1998年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg

キリシタン禁止令の時期の有馬家の領地取り上げを題材にした時代小説である。有力なキリシタン大名の一人娘ミカが主人公である。父はキリシタン謀反の関係で処刑されていった。兄は熱心な信者であるから、幕府はキリスト教に無関心である弟を跡取として任命している。兄は神父たちと一緒にキリスト教を守り、父の謀反計画をなんとかして継続したい。そのためにスペイン人に連れられた若いオランダ人を奪い、彼に最新の鉄砲を作らせている。ミカは兄と弟の間に立ち、好きになったオランダ人の扱いと兄の野心によって徐々にキリスト教には疎遠になっている。最後、ミカはオランダ人を平戸に帰らせるために人質として兄の所に行っている。

この時代小説のなかで西洋のキリスト教信者の強い権力欲（ポルジュガルの神父）や金銭欲（スペイン人）、彼らの自己中心主義が強く批判される。その意味で著者は1つのモチーフの表現方法を更新したが、もう1つのモチーフである父への愛着は継続した。そのモチーフは娘の処刑された父への思いと父の多層な面の発見を題材とした。ドイツの大衆文学で時代小説ブームがあった。松原氏はこのブームに乗り、単純な恋愛ストーリーと混ぜて、時代考証を無視した²¹偏見を促進するものを書いた。

「その際ヨーロッパ人の多くが気のついていないヨーロッパの影の部分をおは強調してきた。別にヨーロッパに怨みがあるわけではない。ヨーロッパは私の第二の故郷であり私の仕事を真剣に支えてくれる読者が各国に数え切れないほど住んでいる。また、お互いの悩みを語り合い、心を許し合った友達もずいぶんいる。お世話になった人々も多い。素晴らしい思い出を綴れば限りない絵巻となろう。ただ、そういった私情とは別に、ヨーロッパの影の部分をはっきりさせておかないと光の美しさがわからない。」²²

日本での活躍

ドイツに滞在しながら、中央公論や新潮に寄稿した。このような活動の他、

松原氏は1974年から日本語で第一冊目の本をだしたが、1985年の第二冊目まで「このあたりの裏事情は、日欧比較文化史の異色の日本人研究者で、四半世紀以上ヨーロッパに在住し、ドイツのゲッティンゲン大学において専門研究を重ねた松原久子の著書、『日本の知恵ヨーロッパの知恵』のなかに詳しい。国内ではほとんど無名の松原だが、同書の内容が実に興味深く、しかも説得力に富んでいるのは、著者の視座のとりかたがヨーロッパ一辺倒ではないことにもよるだろう。むろん、その研究を裏づけているのは、日本人離れした行動力を駆使して集めた膨大な関係資料と卓抜した分析力、さらには透徹した歴史推理能力だ。」²³の状態であった。

『日本人とドイツ人』1974年 三晃書房

教育研究家高橋敷が二か月ドイツのケルンに滞在し、その間に高橋氏と松原氏、フロインド氏と座談会をおこなった。この本はその座談会と日本人に何を望むかから構成する。このとき松原氏は日本も厳しく評価し「男も女も、今の日本は、だらしがない。だらしなくせに、目の前の競争に血まなこである。血まなこではあるが、心の中は空虚である。(p.225)」や結婚の場合学歴や家族背景にこだわる、そしてヨーロッパに好意的であった「法の力が動き、倫理が底を流れ、愛が人を支えていることを、私は十数年に過ぎないとはいえ、あらゆる生活の場で体験して来た。(p.225)」男女関係について労務者階級の騎士性がないと述べる、自己評価が低い日本女性がゆっくり確かめずにそのような人と結んで、ひどい目にあったと警告する。

ドイツ語で書いた“Weg zu Japan”を日本語訳して『日本の知恵ヨーロッパの知恵』として出版した。

この著書に様々な生半可な事実がある。ドイツとヨーロッパの諸国はよく区別されていない²⁴。以下の引用は日本保守派の読者の受け止め方をしめす。

「著者はアメリカ、ヨーロッパ、日本の比較研究から、日本人の政治感覚のひ弱さを指摘する。…日本人は自分たちのアイデンティティを守らなければ滅びてしまうという切迫した危機に立たなかった。だから外界に対する警戒心もなく、敵愾心などはさらになく……。」²⁵

「日本の大学などで日欧関係やキリスト教などについて講義するときは、秀吉や家康時代の日本人が如何に残虐であったか、宗教の自由や個人の人格についての認識が如何に欠如していたか、どこまで国際性に欠けた偏狭な閉鎖的精神の持ち主であったかを、宣教師たちの殉教に絡めて強調するのが普通である。学生たちも、何の疑いもなくその説明を受け入れ、素直に恥じ入ったりするが、

もっと日本人は歴史的想像力を働かせ、国際的視野からその問題の本質を考えてみる必要があると松原は指摘する。歴史を大学受験の道具の一つくらいにしただけを考えていない学生がほとんどであることを思うと、なんとも耳の痛い言葉である。

日本における宣教師の殉教者数は多く見積もっても数十名程度で、しかも、国外退去命令や布教禁止を受け入れれば処刑されることも迫害されることもなかった。それに較べ、ヨーロッパにおける宗教戦争や異端弾圧の際に殺害された聖職者や一般信者の数は途方もない数にのぼり、その手口も目を覆いたくなるほどに残酷このうえないものだった。日本におけるキリシタン弾圧の程度は、ヨーロッパならごく限られた地方の宗教弾圧史にさえも取り上げられるかどうかのレベルで、当時のヨーロッパ人のほうがはるかに残酷だったと断定できるとする松原の主張は、なかなか興味深い。

松原は現地のマスメディアをはじめとする公的な場などに積極的に登場し、かつてのキリシタン弾圧や鎖国政策を含めた日本人の残酷さと狭量さを批判するヨーロッパの学者たちと何度も渡り合っている。そんな時など、数々の資料をもとにヨーロッパの宗教学者や文化史の専門家に反論すると、彼らは返答に窮することが少なくないという。思想史とか文化史上の史実の評価というものは、絶対的なものではなく、きわめて相対的なものであるということが、この話からもよくわかる。」²⁶

日本は批判され、日本の若者はそれを信じるので、愛国心が育たない。それに対して松原氏はヨーロッパのほうがより悪かったと論じ、西洋人の批判を碎くと書評する側が喜んでいる。しかし他の人がより悪いというと、自分の責任を免れないであろう。

『和魂の時代—開き直った「杭」は打たれない!』三笠書房 1987年

ベストセラー『日本の知恵ヨーロッパの知恵』の著者の“21世紀への真・国際人論”。なぜ、日本人は白人にすぐ頭を下げてしまうのか—不条理な外人コンプレックスを吹きとばし、地球化時代にふさわしい“ものの考え方・行動のとり方”を説く、とカバーの宣伝文が述べている。

「日本人は自分たちについて三つの誤解を抱いている。第一に、日本人に獨創性が少ないのは、言語も習慣も同じという同質社会に生存しているからだという誤解である。

誤解の第二は、日本語はこの上なく微妙な言い回しや婉曲な表現を行うから、そのものずばりで論理中心の西洋人とは言葉の使い方が根本的に違うのだというものである。

第三は、立派な家を建て、家具や内装に凝り、衣服もブランド物を集め、家族そろって長い休暇を取り、ゆったりと生活すれば人間性豊かになり、幸せになれるという誤解である。(カバーの紹介文)」この著書の中では以下のテーマが論じられている。

内容：日本流「島国根性」の強み・西欧流の「ものの考えかた・反応のしかた」・大きく変わる「真・国際人」像・異国の中のたくましき東洋人たち・花も実もある「才媛たち」の時代へ・日本が「西欧の没落」の轍を踏まないために

松原氏は先の著書の主張を強めて、多少に増補した。特に、女性と日本女性像についての章が付き加えられた「異国情緒に培われた日本女性像 (p.162)」。

ヨーロッパに対する批判が強い²⁷。「各問題点についてそれを証明すると反証になる例をあげることができるので、学術的に納得させない。しかしその言い方によって完全な悪というイメージが作られた。このようなやり方は情報よりプロパガンダに近い。

『言挙げせよ日本』 2004年 プレーシデント社

「副題に『欧米追従は敗者のみち』とあるように、日本も今こそ欧米の歴史的本質を知る必要があると筆者は主張している。『葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国』と万葉の昔から日本では、言挙げせぬことを美德としてきた。またこれが一つの日本的文化となった。しかし、国際社会では無能の証拠となる。このためには、アメリカ・ヨーロッパの文化、歴史的背景にメスを入れ、国際社会を動かす方法、手段を心得た上で日本はどうするかを考えてほしいと主張している²⁸。」この著書の中では以下のテーマが論じられている。

内容：外界との対決・ヨーロッパの対外姿勢・アメリカ世界戦略とその方法・ヨーロッパの自然と宗教・欧米に対する誤解と崇拜・アメリカ社会の日常・ヨーロッパ文化あれこれ・日本を想う時

この中に先の著書から馴染みがあるテーマ、例えば第4章のヨーロッパの白人奴隷貿易の話、が出たが、20年弱のアメリカ生活から生まれたアメリカ考察の分が大きく増えた。『日本の知恵ヨーロッパの知恵』に表現した親米感が長期間のアメリカ滞在と湾岸戦争によって変わってきた。二回目の渡米以前に親米的な意見はアメリカの新帝国主義との出会いによって、徐々に増していく批判的な調子に変わってきた。

松原氏の解釈本は参考文献の増加と時勢の変化とともに、再整理され、焦点が多少移りながら趣旨を保ち、再出版された。著者は日本と欧米な対等の付き合いを求め、その上に反米を扇ぐつもりはない。「日本人としての誇りを持ちつつ嫌米にはならず、アメリカやヨーロッパの裏を熟知しつつ戦略を練っていく

地道な知的作業が日本にはまだ根付いていない。(p.17)」著者は日本批判を念頭に置いて、それに対抗する本を出したかったのであろう。しかし独立した作品として、偏っている。それによって日本保守派の読者の嫌外国感情を具体例で裏づける役割を果たしている。これによって著者の「嫌米にならず」に反する結果を齎している。攻撃的に論点を並べることが国際理解を促進しない。

「日米戦争はアメリカの仕掛けた深い大きな罠に落ちたためと指摘し、日本人の思惟方法を熟知した成果だとも。ニュールンベルグ国際軍事裁判はホロコストによる人道上から行ったものであり、極東軍事裁判とは異にする。日本人はこの裁判による犯罪史観が自虐史観となり、戦後半世紀を経過しても日本社会を左右している。アメリカが先の大戦後、『いかなることがあろうとも戦争は悪い』と日本を裁いた時、深く恥じ入り、イラク侵攻でアメリカが『戦争をしない日本は怪しからん』と怒り、その通りだとまたもや恥じ入った。半世紀を過ぎながら、この一つについてさえ自分の物差しを磨いてこなかった。自分たちの歴史的体験から滲み出るひとつの覚悟も示さなかった。『日本だけは何もしなかった』と言われるのを恐れ、130億ドルを拠出しても、その使い道に無頓着。日本人は、アメリカの『イラク侵攻突然論』を見抜くだけの史的体験を持っていたはず（真珠湾攻撃に対するアメリカの対応）と。

西洋社会での演繹的論理の建て方が日本にはなかった。日本では幕末に至るまで、民族の存亡を駆けて交渉するという切迫感を味わったことは一度もない。何とか相手を納得させることができるかという研究がなく、伝統とはなり得なかった。日本人は、反論に反論を重ねる西欧式対決ではなく同感方式、効果的に言い返すだけの思考的訓練ができていない、議会でも表向きの演技に終わる。西欧人は、ふつうの会話でも、相手の感覚や知識が全く異なるのが当然という前提で話し合いを始める。お互いに譲歩し、順応し、適合する習性を身につけた日本人とは異なる。友好関係は国際社会において常に流動し敵対関係に急変するという意識が必要という。

筆者が訪れた40年前のアメリカは、治安、秩序、効率の面で立派な社会であった。現在の借金消費、訴訟社会、麻薬や暴力の日常化は、我慢を捨て希求するものはその場で獲得、それが自分の権利であり人生という哲学が社会に行き渡った結果という。日本はアメリカの要求を全て受け入れているのに、日本市場の閉鎖性や不公正な商行為は神話の域、しかし皮肉なことに日本市場に入り込むのはヨーロッパの国々。アメリカは日本の生活習慣に無関心で、ただ市場を開けと言ってもヨーロッパ諸国の売り上げを増すことに尽力したようなものとの指摘も手厳しい。」²⁹

「どうやら日本人はとことん自分達を卑下せずにはおられないらしい。『えひめ丸』と米原子力潜水艦の衝突事故の報道の中で、ワシントンポストによる『我々はもう充分謝った』という記事を日本のマスコミがこぞって取り上げたことは記憶に新しい。アメリカの世論においてはこの記事に対する批判も為されているというのに、それを報道したマスコミはどの程度あったのだろうか。…国際貢献は自国の文化を大切にるところから始まり、国際交流は自国の文化を正しく伝えるところから始まる。やたらと外国と比べてみる面白半分の遊びから脱却し、国際社会の中で日本人であることの誇りを持って歩いていくために、一読に値する本である。」³⁰

「ドイツのテレビ番組で、これだけ明快、かつ論理的に主張する日本人がいたとは、うれしい驚きであった。…松原氏は大変な経験をされたわけだが、これによって多くのドイツ人に対して、日本の戦争犯罪とドイツのホロコーストとを同一視する過ちを認めさせた氏の『言挙げ』に対して、謝意と敬意を表したい。同時に、このような『言挙げ』の方法は、国際社会で生きる日本人が大いに学ぶべき術であると思う。…これは今もアメリカが国際社会でよく使う手口である。たとえば貿易黒字を続ける日本は市場を解放していないからだとして、次々と罰則を作り、制裁を加える。さらに IWC (国際捕鯨委員会) のような国際機関も、国益追求の道具にされている場合がある。近年よく唱えられる『グローバル・スタンダード』も、自国に有利な基準を押しつける場合の『美しい言葉』として使われている場合が多いので要注意である。」³¹

西洋の議論方法の裏を見抜くことは重要である。しかし、日本人は良心を持つので国際政治や経済の場でいつも不公平に扱われているという被害者意識を持つことは問題である。日本はただ良心と努力で第二経済大国まで上り詰めたわけではない。相手の論拠の裏に自己利益が潜んでいるので、その論拠が必ずしも間違っているとは言えない。

終わりに代えて

松原氏はドイツにおける移住民文学の一人の先駆者として、ドイツ人に自分はどうのように外国人の目に映っているのかを教えた。その反応はよかったので、他の外国人作者が勇気付けられたことであろう。しかし彼女は大学やメディア環境がよかったので、外国人労働者ほど軽視されていない。彼女の問題意識は彼らほど強くなかった。異国情緒的見方とヨーロッパ中心主義と出会って、自分は日本人としてどのように対応すべきかと考えた。しかしドイツ人が面白可

笑しい批判に喜んで、笑って済ます程度であった。著者は読者市場の要求をよく感じ、その要求に合わせて書いた。よくドイツ人の先入観(エキゾチシズム、伝統)を利用し、ドイツの読者の期待に応じた。初期のドイツ語の著書ではドイツに厳しくて、日本語の著書では日本に厳しかった。日本経済が世界市場に攻め込んだ時期の批判が高まる中に、日本の社会に批判的な小説をだして、日本にあこがれた時期に日本を絶賛する日本人論を書いて、バブルとともに日本へのあこがれがなくなると日本の社会に批判的な小説のシリーズに4冊目を追加し、最終的に啓蒙的な意思を捨て、表面的な偏見を強化する時代小説を出した。このモチーフが最後の小説にも明確にでた。日本では新しい保守主義、堂々と対外に自分の意見を弁明する日本人のモデルとして活躍している。

初著書の随筆のようなスタイルが誉められたので、純文学への挑戦もあったが、結局諦め、時の流行に沿って日本の解説者に止まった。ドイツ語という外国語をそのままマスターするほうに努力し、ドイツの読者に認められるほどであった。後輩である多和田葉子はその日本解説の枠にはめ込まず、文学として認められた。松原氏がその方向に発展しなかった、もしくは読者にはまだそれを受け入れる心構えがなかったからであろう。

著者の各著作に父への愛着と尊敬を窺わせる。日本の家庭構成上、父は尊敬された存在であった。現代日本社会ではほとんど留守にする父の位置が完全に崩れ、新しい形の復活しかできない状態になったが、松原氏の場合、父の職場であった神社が住宅のすぐ近くで、戦争中の愛国主義に反対した父の権威が、敗戦によって傷付けられていなかったもので、父の影響は強い。それに対して、世論に調和しながらその中に主導権を得ようとする母の態度は、時勢と共に転換し、娘の信頼を損なった。その上、母は娘を自分の女性像に従って構成したがるので、娘から強い反発をひきおこした。

欧米生活の長い松原氏が実際に感じた西洋の自己中心主義によって自分の文化背景が否定され、神秘化された東亜像に出会った。しかし、それに屈することなく、または感情的に背を向けることなく、その自己中心主義に対抗した。ドイツ語でその主張を広める才能があった。松原氏の母国文化意識の源は宮司であった父であった。西洋の自己中心主義の中心は、キリスト教の絶対的な一神教であるとみえてきた。松原氏はそのキリスト教の自己中心主義に、日本におけるキリスト教の高校・大学の時代に出会い、初期はそれに魅了された。キリスト教信者であった松原氏はそれに対する反論が著書のなかで徐々に強まった。松原氏の日本は現実の日本ではなく、また昔の日本でもない。松原氏の日本は父の影響と西洋中心主義との対立によってできあがった。例えば在独トルコ人がイスラム原理主義に向けること³²がするがそれと同じように発展した。

両故郷に挟まれて、空想で母国を理想的に再編成するということである。これを持って、滞在国に対抗し、理想の母国にほど遠い母国にも激しく批判し、変化を迫る。その意味で、松原氏の発展は移民文学の中の1つの傾向をみせている。しかし、自分の体験に基づいた小説の中の日本と解説書の中の日本は、未だに統合していない。

参考文献

- Killy, Walter : “Literaturlexikon” Bertelsmann Gütersloh 1992年
Matsubara, Hisako : “Abendkranich Eine Kindheit in Japan” Albrecht Knaus Hamburg 1981年
Matsubara, Hisako : “Blick aus Mandelaugen Eine Japanerin in Deutschland” Piper München 1968年
Matsubara, Hisako : “Brokatrausch” Albrecht Knaus Hamburg 1978年
Matsubara, Hisako : “Brückenbogen”, Albrecht Knaus Hamburg 1986年
Matsubara, Hisako : “Glückspforte”, Bastei Lübbe Bergisch-Gladbach 1982年
Matsubara, Hisako : “Himmelszeichen”, Albrecht Knaus Hamburg 1998年
Matsubara, Hisako : “Hisako Matsubara’s kleine Weltausstellung Ein literarischer Pavillion”, Piper München 1970年
Matsubara, Hisako : “Karpfentanz”, Albrecht Knaus Hamburg 1994年
Matsubara, Hisako : “Raumschiff Japan Realität und Provokation”, Albrecht Knaus Hamburg 1989年
Merian: “Tokio”, Hoffmann u. Campe Hamburg 1972年
Merian: “Japan”, Hoffmann u. Campe Hamburg 1980年
Nishitani, Yoriko : “Literarische Auseinandersetzung mit der zerstörten Mutter/Tochter-Beziehung in autobiographischen Prosawerken deutschsprachiger und japanischer Autorinnen”, Peter Lang Frankfurt 1998年
Tawada, Yoko : “Talisman” konkursbuch Tübingen 1996年
“der Literat” Zeitschrift für Literatur und Kunst Nr. 9, 1971年
- 土屋勝彦：『越境する中間地帯を求めて-多和田葉子論への試み』『人間文化研究』2号 名古屋
古屋市立大学大学院人文文化研究科 2004年
松原久子：『言挙げせよ日本 欧米追従は敗者のみち』プレジデント社
松原久子：『日本人とドイツ人』三晃書房 1974年
松原久子：『日本の知恵 ヨーロッパの知恵』三笠書房1985年
松原久子：『和魂の時代 開き直った「杭」は打たれない！』1987年

http://www.ne.jp/asahi/manasazi/ichi/heiwa/tennki_3_9105.htm (04.07.11)
http://kougakutosho.co.jp/mathematics/mathematics_64.htm (04.07.11)
<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/AISIN483791344X/qid=109> (04.07.11)
http://www02.so-net.ne.jp/~n_kawa/main/book01.htm (04.07.11)
<http://www.gem.hi-ho.ne.jp/Books/book017.html> (04.09.29)
http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogbd-h_13/jog172.html (04.09.29)
http://de.wikipedia.org/wiki/Hisako_Matsubara.bibl (04.07.11)
<http://www.uni-mannheim.de/mateo/verlag/diss/hansmeier/kap-034.html> (04.09.29)
<http://www.welt.de/daten/2002/05/28/0528fo334569.htx> (04.10.24)
http://www.zeit.de/2002/06/Politik/200206_essay.pipes.html (04.09.24)

注

- 1 1905年にブルガリアに生まれた1981年の文学ノベル賞受賞者 Elias Canetti はドイツ語で著述した。ドイツ語は両親の間の言語であった、親と子供はセファディム（スペイン系ユダヤ人の言語）を話した。
- 2 1781年-1838年 フランス貴族としてフランス革命から逃げ、ベルリンで作者、詩人、植物学者として活躍した。
- 3 土屋勝彦「越境する中間地帯を求めて」『人間文化研究』2号
- 4 それ以外に“Liebe zu einem ungeliebten Land”『愛されていない国への愛』1988年 Albrecht Knaus Verlag Hamburg、子供向きの数学教科書一冊、油絵の教科書一冊、多少の雑誌記事がある。
- 5 逆に多和田氏が「ヨーロッパは自己批判にだれも負けない、それは1つの特徴である。」Talisman 1996年 p.48
- 6 週間雑誌“Stern”, (http://de.wikipedia.org/wiki/Hisako_Matsubara.bibl)
- 7 Hannoversche Allgemeine Zeitung,
(http://de.wikipedia.org/wiki/Hisako_Matsubara.bibl)
- 8 “entzückt-entzückend aus ihren” “Mandelaugen”, “kindlicher Charme,” “der Literat Zeitschrift für Literatur und Kunst” 1971年9月 p.172
- 9 日本の第一作で、この著書を「ドイツ人と日本人」と呼んでいるので、それは著者がドイツ語題の問題をよく意識していることを語っている。「日本人とドイツ人」裏頁の著者紹介
- 10 Matsubara “Blick aus Mandelaugen” 1980年：p.7 前書
- 11 ホルスト（共）「ドイツの外国紹介雑誌に描かれた日本」日系広告研究所報196号
- 12 “Glückspforte”のカバーにある先著書の書評、週間新聞“Deutsches Allgemeines

- Sonntagsblatt”を引用する。
- 13 松原氏がこの著書でこのやり方をパロディー化したのが、本人はその方法もよく利用している。ドイツ側に対して、父がローマ法王と対等に会談するほど重要な宗教者であり、家は長い歴史を持ち、母の家は朝廷の儀式を司ったことと述べている。日本側に対して、彼女は父と法王の会談に通訳として出席（和魂の時代）や1989年のツーリッヒのヨーロッパ経済会議に基調講演をしたと述べる（言挙げせよ日本）。その権力を測れない法王や重要そうな会議によって、自分がいかに日本と欧州に通用する人物であるかをアピールする。
 - 14 S.ホルスト（共）「ドイツの外国紹介雑誌に描かれた日本」日系広告研究所報196号
 - 15 日本語版『日本の知恵ヨーロッパの知恵』 p.12
 - 16 日本語版『日本の知恵ヨーロッパの知恵』 p.12-13
 - 17 確かに庄屋決定に投札制の例もあるが、領主の認定権、投札できる村の有権者の割合、庄屋の世襲制などを無視し、江戸時代を民主主義のように描いた。そのほかに將軍本人は権力を持たなかった（p.91）や老中の半数が世襲制、半数が試験によって任命された（p.92）、年貢は領主と村民を一緒に決めた（p.48-49）、農民は土地を所有しなかった（p.122）、権力側はめったに日常生活に介入しなかった（p.90）、京都は重要な問題以外に自治権があった（p.72）
 - 18 “Blick aus Mandelaugen” p.70
 - 19 「昔の人種論の奇妙、可笑しな再現」（p31）
 - 20 松原氏は1974年の「日本人とドイツ人」の「日本人に望むこと」でちょうど日本の結婚についてこの小説にテーマになる点を批判した。小説ではこのころが舞台である。
 - 21 史実：お触は守のままに張られている、將軍の朱印は高札に張られている、町民は領主を「ヨシトモダイミョウ」と呼ぶ、名前：渡辺のりょうたろう、姫様は領主である兄をYoshと呼ぶ、姫様が自由に館の外に徘徊する；表現としてヨーロッパの中世に思わせる：囚人は天守閣に捕らわれている；主人公の非現実的な能力：捕らわれたまま鉄砲の作業に負われるのに、急にどこからか日本語ができ、日本語の細かい意味合いまでも分かる。
 - 22 『日本の知恵—ヨーロッパの知恵』 p.227
 - 23 http://kougakutosho.co.jp/mathematics/mathematics_64.htm
 - 24 ドイツの宗教税はヨーロッパ全土の国家教会関係の特徴であるや無宗教者は職場などに不利に扱われている。
 - 25 http://kougakutosho.co.jp/mathematics/mathematics_64.htm
 - 26 http://www.kougakutosho.co.jp/mathematics/mathematics_22.htm
 - 27 「弱者を徹底的に叩くのが欧州流儀」「謝罪ではなく弁明のしたたかさを（p.109）」「西洋にも「個人主義者」はひと握りのみ（p.148）」
 - 28 http://www02.so-net.ne.jp/~n_kawa/main/book01.htm
 - 29 http://www02.so-net.ne.jp/~n_kawa/main/book01.htm
 - 30 <http://www.gem.hi-ho.ne.jp/hirokei/Books/book017html>

- 31 http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogbd-h_13/jog172.html
- 32 イスラム原理主義は若い在独トルコ人の間に広がる。
(<http://www.welt.de/daten/2002/05/28/0528fo334569.htx>) しかし原意は貧困で
はなく、西洋の理想にの絶望である。
(http://www.zeit.de/2002/06/Politik/200206_essay.pipes.html)